

薄物都々逸研究

菊池 真一

三田村鳶魚は『瓦版のはやり唄』（春陽堂。大正十五年）において五十七種類の流行唄を翻刻した。その中に都々逸が五種類含まれている。

荻田清氏は「上方の噺家と天保・幕末期の流行唄「上」 薄物の唄本より」（『芸能史研究』九二号（一九八六年一月））において、数丁の小冊子を「薄物の唄本」「薄物唄本」と呼んだ。北川博子氏は、これに従い、『阪急学園池田文庫所蔵 薄物唄本目録』（一九九三年十一月）を編んだ。

ここでは、都々逸本のうち、共表紙の数丁のものを「薄物都々逸」として扱う。以下、菊池蔵の薄物都々逸本を翻刻紹介する。いろは物とその他とを分け、それぞれ題名の五十音順に紹介する。（いろは物は末尾に紹介する）振り仮名は省略。清濁は原本のまま。文句入りの部分は「」に括った。都々逸以外のものが交じっている場合がある。

一 東形恋の道連於津奈都々一

東形恋の道連於津奈都々一 上
馬喰町三丁目 吉田屋小吉版「一オ」

夜風しのびてあのまどしたを「そばう／＼／＼正月やしるごぞい」おでんかん酒寒さ忍びてよしずばりけあさ口に「雪折笹に村雀おやどはどこじやとあてもない」

なんとしたふかいかたきのあくえんじややら「しん内 明からす」そなたもともにと言たいがいとしそなたを手に懸て「どこへわかれていかりやうか」（一ウ）

あゆみやららずにふと立止り「上るり かゞみ山」ア、気にか

ゝる／＼辻うらの今のはなしからすなきの此わるさアレ／＼／＼けしからぬ胸さはぎはコリヤお宿へ行れぬはいのやうすはしるゝこの文ばこ」ふうもおしきるしやうおもひ

なにはぢに主はすみなれ身は東路にやぶれしやうじがかみこひし」（二オ）

かほでふりつけこゝろでないて「しん内 明がらす」あんまりむごいなさけないけふしはなれてこなさんを無事である身の有ならば」あふてたのしむ事もある

気は心どんなきじんもころりとさせる「油や／＼でございみんなしよはうのうら／＼へ」しやくをまけるやあぶらうり」（二ウ）
吾妻がた恋の道連於津那都々一 下
よしたやはん」（三オ）

あすはかへりてまたきなんせと「しん内 あはしま」いふたはふたりがいつまでもはなれともないこゝろから」といふてわたしをうまくはめ

たこならば七重ひさをばみなさん方へおわびもうさう六十四」（三ウ）

荷もかるくあしもかる／＼して気もかるく「はうた」くまのかわをばあたまへかむり風の吹かは猶更に「くまのあぶらくまのかうやくあかぎれひゞしもやけのみやうやく」（はうた）いふて横丁や寒い所をあるくおまへを思ふゆへ」ちのみかゝへてちんしごと

かよふこひぢもあこぎがあみと「上るり やゑがすみ」いへばこなたはいらへさへうちなみだぐむ計り也」たびがかさなりやあらはれる」（四オ）

竹にすゞめはしなよくしやんと「上るり 彦山」ふしても顔

のかはいらしさちとわらひのふすがたなりふうぞくなり春の柳に
梅花のかをり」あだなすがたがわすらりよか

(はうた) おまへ百迄わしや九十九迄友に白髪を生る迄(言)
大ふくもちあつたかい／＼／＼ふかしたてさつまいも(はうた)
といふてつぢ／＼の風の当らぬとこへ立よりよぶこゑもみんなわ
たしが有ゆへに(とゞ一)といふていまさらきれられぬ(四ウ)

二 浮世都といつ

浮世都といつ 初へん

馬喰町三丁目

吉田屋小吉板(一オ)

羽子をつく／＼あんじて見れば風にそれたも気にかゝる(梅ボリ
鶯我)

のぼりつめますほうずもなしに糸のありたけ奴風(浅クサ 唄女
とめ)(一ウ)

花の兄イといはるゝ梅だ人にけぢめをとるものか(都雄二)

ゆきかさくらかとは山どりのおまへはあらしのしたごゝろ(梅ボ
リ喜三)(二オ)

腹がたつならわたしのからだこゝろまかせにしやしやんせ(梅ボ
リとく女)

めぐるいんぐわの車のわたしひくにひかれぬこのしだら(梅ボリ
玉我)(二ウ)

お客をとる気はしみ／＼ないがうつりかはりにこまるゆへ(梅ボ
リ喜作)

女房にしちやくどかせむりがりさせてなまけてゐるのもほどにし
な(梅ボリ語笑楽)(三オ)

かういふわけだとうちあけたならおまへのおせわはなさんせう(梅
ボリとく女)

ぬしのあるのにいのちをかけてまよひそめたがいんぐわづく
(全)(三ウ)

湯やのかへりで見かはすゑがほしみ／＼しんぼができればせぬ(浅
クサ 唄女そめ)

しやくをおさへしその手をおさへぬしのたんきでこのやまひ(お
なじく ちよ)(四オ)

西行のふるしきならねどわたしのからだ一生しよつてゐるがいゝ
(梅ボリうた女)

せつかんもなんのいとをふいのちもやつた男ゆへなら苦にはせぬ
(浅クサ 唄女はん)(四ウ)

浮世どゝ逸 二へん

馬喰町三丁目

吉田屋小吉板(一オ)

見まいとおもへどついおたがいにかほ見あはしてはしらぬかほ(梅
ボリ小てふ)

くぜつの種なしはだうちとけずかほはいつでもはつもみぢ(全)(
一ウ)

うつゝこゝろではしらにもたれおきてゐながらぬしの夢(梅ボリ
語笑楽)

けふかあすかのかはいゝ中も淵が瀬となる世のならひ(梅ボリ常
二)(二オ)

身にはおひへをまとつてゐてもこゝろに着てゐるあやにしき(梅
ボリとく女)

いろのあるのを初手からしればかうしたわけにはならぬもの(梅
ボリ横利)(二ウ)

なれないま男ていしのかほに泥のつくはづころぶゆへ(サクラ川
新孝)

うはきといはれりや一言(いちごん)もないがおまへに見かへる
初手のいろ(梅ボリとく女)(三オ)

女房かたぎではなこそさかねじみなみさは雪の松(梅ボリ唄た
ね)

屏風ひとへのわか床なればしんのはなしはのこりがち(浅草大工

徳)「(三ウ)

しらぬたびねもおまへとならば夜みち雪みち苦にはせぬ(梅ボリ
小きく)

娘のいろだとまだ気もつかずりこうな人と親がいふ(梅ボリ横
利)「(四オ)

はなもさかせずつぼみの枝をおつたわたしのつみつくり(梅ボリ
玉我)

見とめもつかないはかないわたいやになつたらよししな(梅
ボリ東嶂)「(四ウ)

うき世都々いつ 三編

馬喰町三丁目

吉田屋小吉板「(一オ)

男にのまれちやいくじがないとおもへどほれたがぶはたらき(梅
ボリ鷺我)

風に蚊やりがもえたつまゝにむねのほむらがなほまさる(梅ボリ
瓠友)「(一ウ)

たまに来てさへはなしもできずかほでわらつて胸でなく(梅ボリ
とく女)

すへはどうかとあんじるやうでてんからいろになるものか(全)「
(二オ)

男大事にするほど親を大事にしたならほろられう(梅ボリ横利)
ひよわいからだでかせぎがたらず貧苦させるがいぢらしい(梅屋
斧)「(二ウ)

あんじなさんなよおまへをおいてほかにうはきをするものか(梅
ボリ金松)

やかましい親の目がほをきわどい間にもぬけて来るのがかはいそ
う(梅ボリたき女)「(三オ)

はしごかけてもとゝかぬねがひかゝアたばねがして見たい
義理にからまれこゝろの竹をやゑにくんだるかございく「(三ウ)

ひゞは手にきれ板の間ずれがかゝとにできるもあら世帯(梅ボリ

たき女)

朝はひでうの田へ水かけて夜るは潮来へ舟わたし(梅ボリ喜作)「
(四オ)

おかしらしいところをつけて見れば目につく事ばかり(梅ボリ
小てふ)

梅暮里唄種校合

哇並踊拳指南 浅草広小路日音院地内奥

梅暮里「(四ウ)

三 江戸中若衆どゝ一書ぬき文句 上

江戸中若衆どゝ一書ぬき文句 上

馬喰町三丁目

吉田屋小吉板「(一オ)

ぎりもせけんもまよはぬうちよこうなりやりもひもわからない
ないてまちあふてなみだのかわかぬうちにまたもなかせるあけ
がらす

がらす

むりなしゆびしてよばせておいてすねすとぶつともしかるとも
つれなくされてもいやかられてもわたしはいやにはなられない「
(一ウ)

こふしたつとめの身でさへやけるしるふとのおまへさんはむり
じやない

しやくがさしこむもつきゝましたわかればなしはむだなこと
みちならぬことじやよそふとおもふちやいたがすがいんぐ
はでせひがない

おたがひにきをしりやむりだとしりつゝぐちをいふと思へどな
をかわい「(二オ)

ほれてくらうはせつちでするにいけんするとはきがしれぬ
むりを手にしてあきさせやうかそんな手でゆくわししやない

うちしやせかれるそとはなぶるたよるおまへにやすねられる
つらいつとめはつらくはないがしのんでかよぶがつらからう「

つらいつとめはつらくはないがしのんでかよぶがつらからう「

(二ウ)

四 江戸中若衆どゝ一書ぬき文句 上

江戸中若衆どゝ一書ぬき文句 上

馬喰町三丁目

吉田屋小吉板「(一オ)

ぎりもせけんもまよはぬうちよこうなりやりもひもわからない
ないてまちあふてなみだのかわかぬうちにまたもなかせるあけ
がらす

むりなしゆびしてよばせておいてすねすとぶつともしかるとも
つれなくされてもいやかられてもわたしはいやにはならない」
(一ウ)

人のこゝろはわからぬものときまればじせつをまちもする
恋もむじやうにかわらぬうちとさとりすくしてこのしだら
きれておまへはしゆつせをせうがたれをたよりにわしはする
のめばたまにはわすれもせうがしらふなわたしにひまはない」
(二オ)

やりくりがつきりやわたしをまたぶちたゝき「(コトバ)コウ
吉やかぶでかゝアをいじめることそんなことはゆめにしておいら
のうたをきくがいゝよ(そゝり)いまなるかねは三井のかねこゝ
ろはやばせとおもへともねつからさきがいし山ではづにぬれる
が夜るのあめ(言)ヲヤ権さんそりやアあふみ八けいだの「そふ
よ「おいらがうちは七けいだからけんくはができりるよ「そりや
ア又なげだ」ぜゝがないからこのしだら」(二ウ)

五 江戸のはな名所文句芸者よしこの 下

江戸のはな名所文句芸者よしこの 下「(一オ)

にほんばしやお江戸のまんなかお顔じやおはなよおはらじやお
へそよ「あだなあねさんまん中まん中がまん中だ

やがて二人がねがひもかなすぎしんじつほんしばさほのさきへ

すがもりうはきをやめて「ぬしもしんぼうをしながはよ」(一ウ)

いつか青山と待こがれても(しん内)「あへば顔さへ赤坂でめ
ぐるにうるむ涙さへすこしは思ひしろかねといへ共きづよいおと
こぎの「ぬしはあざぶできがしれぬ

四谷新宿でつい日がくれて花のきみたちのかほをながめてとほ
したいにもてうちゃんがござらぬ「これがあやめわかぬしんのや
み」(二オ)

早稲田ノゝとよふ名を付たいつのまにやらついで実がいつてうま
いあぢだと評ばんされる「ほんにあのこめはわせなこめた

はなのよし原を青楼とはたがいひ初た「ふけてあつくなつてか
よふきやく「せけなんだかなんだか」(二ウ)

六 おつこちのこゝろいき

しんはんとつちりとんはうたどゝ一ぶし

おつこちのこゝろいき

両ごくひろこうじ

両ごくや板「(一オ)

ひとめおゝけりやついそれなりにないてぢれふすみだれがみ
おもはぬふりするこのやせがまんつのりやぢびやうのしやくと
なる

きいてこわらしみてうつくしいほれてなかせるとうがらし「(一ウ)

さけにまぎれてうらみもいふがしらふぢやしらばげてむかぶづら
そのさけおとめておくれよのませぢやわるいしらふでいわせる
ことがある

ほかたたよりのないわたしをばしつていながらむりばかり「(二オ)

いよぶし

これはせけんのによぶぼふのなよせきさきさまにはまんどころ

きたのかたにはみだいさまやらおくがたごしんぞごないほうおか
みさんにはおうちかたかゝあざへもんうちをやつ小ゆびにふうふ
げんくわをするときはひきづりおたふくやまのかみいくぢなし」
(二ウ)

かわたけ

ひきよせてねじめもくるふさみせんのかよふこいぢのいとみち
もきれて人めをしのびごまひくにひかれぬゑまゝのかわあたる
わがみのおやのばち

おつこちのこゝろいき 下」(三オ)

いよぶし

わたしやおまへにおつこちしほりいふさへかほにひぢりめんう
きななたてじまそふをまつぎかみぢんになるもいとほぬがぬしの
こゝろがかはりじまほんにうわきなみづあさぎよこじまはおりい
わんすくちもゆうきになるわいな文がない」(三ウ)

七 薫りどゞー

薫りどゞー

二へん

馬喰町三丁目

吉田屋小吉板」(一オ)

かねをかり宅せつ／＼とかよひゑんよりもとでがきればてた
待もせぬ客はくれどもまつあの人はこゑもまだせぬじれツたさ(浅
クサ 唄女 ちよ)」(一ウ)

しのびあふてもはかなきおふせばこのんで身にやならぬ(お
なじく)

おもひおもふておまへのかほを見ればたがひになみだぐみ(おな
じく)」(二オ)

おもひやりにもまことはとゞくつゆにやつるゝ草の花

なさけなく／＼こひしい今宵 (よぎ)をさかさきてねやう(梅
ボリ 喜作)」(二ウ)

女房がいやでうはきをしたのじやないがされていやならよすがよ
い(梅ボリ横利)

奴々とあだ名のわたしぬしにふられちや身がたゝぬ」(三オ)

こひのなさけやゆかりの色に丘のさわらびもえいづる

雪のはだえになびきし竹のとけて身がるなわがおもひ」(三ウ)

女房にかくしてゐるそのいろをあらけだされちややけになる(梅
ボリ 琴我)

しつてしらないかほされるほどこゝろぐるしいものはない(梅ボ
リ たき女)」(四オ)

り

かわいさうだよきわどい間にもひとめしのんであひに来る(梅ボ
リ とく女)

悪法かくのも男のためにすまぬせうちのわるだくみ(浅クサ 唄
女そめ)」(四ウ)

薫りどゞいつ

三編

馬喰町三丁目

三編

馬喰町三丁目

吉田屋小吉板」(一オ)

みちのない山のさくらはいつふみわけて人がくるやらゑんしだい
今はまつ身でわらはゞわらへすへは高砂そふて見しよ」(一ウ)
といきつく／＼あんじて見ればどうですへにはわかれもの(梅ボ
リ常二)

せつかくのごしんせつだがまづおことはりさんみやうさがしだゆ
めにおし(梅ボリ横利)」(二オ)

気やすめ真うけで鼻毛をのばしかはりのできたもしらないで(梅
ボリ玉我)

すへもしれないあだ縁むすびうはきどうしの実くらべ(梅ボリ喜
三)」(二ウ)

三)

ほれた女房のあるその人になんでこんなほれたらふ(梅ボリと
く女)

さぞやさぞあんじちやゑれともひとめがあればたよりをせぬのも

むりはない(梅ボリたき女)「(三オ)

友だちの亭主にほれてはすまないけれどしあんのほかなら義理もかく(浅草 唄女小菊)

とてもあへねばうたゝねよひ寝夢であふのをたのしみに(梅ボリたき女)「(三ウ)

ほれてゐるのをしつてはゐれどお気のどくだがおことわり(梅ボリとく女)

他人とはおもはぬこつちの実意もしらずへだてこゝろがみづくさい(梅ボリたき女)「(四オ)

なんぼほれたを見ずかされてもばかにされてははらがたつ(梅ボリ小てふ)

安政四巳年初春新板
梅暮里唄種校合

新年度独逸花筏 全一冊 梅暮里連集
新作色香大都会 全 全「(四ウ)

八 心いきどゝいつ続しん文句

心いきどゝいつ続(つゞき)しん文句 上

仙女香 取次

馬喰町三丁目

吉田屋小吉板「(一オ)

ひとにやうはきとおもはれながらむねにくらうがたへはせぬ

うきよのぎりにわしやからまれていとしいおまへにはらたゝせ

だまれおんなめそのくちぐるまうまくのせてももふのらぬ「(一ウ)

なぜにそのやうにはらたてさんすうたがひぶかいもほどがある
まゝにならぬがうきよのならひ(しん内)「ないてうれしい日

もあれば「わらふてつらい夜半もある
なみだにはげしおしろいになをし「(二オ) いやなきやくしゆ

につとめぶり

こひにこゝろもむすばれあふて(しん内)「ほどけもやらすう
つとりと「ねむればおまへをゆめに見る

きつね女郎にわしやばかされてはだかでしんしやうはからほう
ず「(二ウ)

どゝいつ続新文句 下「(三オ)

つらひくがいになみだのあめのはれぬはつとめのつきくらう
きつねおんなにばかされぬうちいなむらかゝしの氣をやすめ

はらをたゝずとまあまたしやんせ(しん内)「おまへのそふし
たかんしやくは「(三ウ) いつものくせとはいひながら「あんま

りじやけんなこゝろいき
ぬしをそのやうなはかないなりにしたのはわたしとなみだぐみ
わたしもぬしゆへねんきをいれて身あがりくらがへうきくらう「

(四オ)

かほも手あしもないしやう迄もやつれはてたよぬしゆへに
はなにあらしもまたくるはるのさかりのじせつをまたしやんせ
まてばかいるのひよりがある?むねのくもりもはれしつき「(四

ウ)

九 こゑじまんうかれどゝいつ

こゑじまんうかれどゝいつ 上

文光堂「(一オ)

はるさめにそよとめがさめきくつめびきでおもはずぬらすがま
くらがみ

おやのゆるさぬさみせんまくらほんにばちでもあたるだろ

おためごかしてできたといわせとふざかるうかにくらしい

すへはなみだとせうちでほれてたべきなるまいこのわさび「(一

ウ)
ないてまちあふてなみだのかわかぬうちにまたもなかせるあけ

がらす
しやくがさしこむもつきゝましたわかればなしはむだなこと

これてくるうはせうちてするにいけんするとはきがしれぬ

みちならぬことはよそうとおもふちやいたがすいたがいんぐは
でぜひがない」(二オ)

くるたびにくるうかけるはめんぼくないといふてあわずにやい
られない

ねたかほをあなにあくほどみるあんどうもなみたてぬれるかく
らくなる

ぜうのありたけしておくからはうそもうはきはさせられぬ
わたしがうすきはさむくはないがしらふじやおまへはつらかる

う」(二ウ)
こゑじまんうかれどゝ」下」(三オ)

たつた今かへしたあとからあいたくなりてとがなきようじをか
みつぶす

井戸よりもふかい心をぬしやくみあげてちやにすりやわたしも
あつくなる

のめばたまにはわすれもせうがしらふなわたしにひまはない
やけばやくほどつのとしれど見ていてうわきはさせられぬ」

(三ウ)

人のこゝろはかはらぬものときまればじせつをまちもする
あるないでくるうたつふりさせたりないでうわきでなかせりや
たのしみか

きげんとらせる気はないけれどあへばあまへてみたくなる
とうざかつたらしんだとおもへいきのあるうちやこすにやいぬ」

(四オ)

わたしが心をぬしやしらぎくで」しん内」あんまりきつよいお
とこ山ひやであらぶがせうちうしてこゝろなをしてくださいせ」こ
とば」いよ／＼としまやうまいぞ」ことば」おや／＼十六や十
七をとしまやとは」ハテそのわけは」どゞいつ」まへのおくら
からしるざけだすてはないかいな引 四丁之内おはり」(四ウ)

十 魁どゞいつ

魁どゞいつ 二編

馬喰町三丁目

吉田屋小吉板」(一オ)

お月さまさへ嫁いりなざる三五でだんこのこができた

のめぬせうちでいつぱいついだ酒はすけたいたゞゝ」(一ウ)
しんのなみだでぬらした袖をぢんすけだますにまたぬらす」梅ボ
リ琴我」

風のやなぎでやるせのなさをおもふおかたにしらせたや」(二オ)
うつかりと籠を出されてした切すゞめもとのくがいがうらめしい
おこつたかほしてついわらひだしはては泣だすふかいなか」(二
ウ)

どふでわたしはぶいきなうまれ花のあたりの翌桜」あすなるふ
(梅ボリたき女)

すへ膳のはしをとらぬはお腹がよいかたゞしや女房がこわいのか
(梅ボリ小きく」(三オ)

だれがまいてもはたけがよいかできる子ども種のちがひ
やつかいものだよちんねこぼゝア口をだすのが小うるさい」(三
ウ)

朝がほやあした味のを捻つておいてぬしの寝おきのはなにす」梅
ボリ常二)

立つけがいとてうしをあはしてゐればうれしがたのはなをま
く」梅ボリ喜作」(四オ)

りんきらしいといはんすけれどだれがこんなにくちにした」梅ボ
リ横利)

あふていはふとおもふたこともいはでわかれてあとくやむ」梅ボ
リとく女」(四ウ)

十一 上品一撰どゞいつ

上品一撰どゞいつ 下

上品一撰どゞいつ

八丁ぼり 松坂やはん「(一オ)

つきあいと人をかこつけよくそのかほでいひわけされるにはら
がたつ

よざくらにうかれたしよかいときのうたぐりはゆきのふるよが
あんじられ

よそへあがるをせくのじやないがしらぬがほとけでくちおしい
うしろすがたをもしへとよんでかほがちがつてきのどくさ「(一
ウ)

まことしんほふひとつといふかあわずにしんほはできはせぬ

あきらめるいぢか有なら何此やふにばかなおんなといわれな
もときにまさりしうらきといふがもとのおかたにやかへられぬ
あれがわかれとせられたらほんにはなしのこしはせまいもの「(二
オ)

たま／＼しゆびしてあふみはほんにはなすはなしもあとやさき
とてもそわれぬあくゑんならばせめておそばでこまつかへ
おまへばかりをおとこのよふにまもるわたしの二ほんほう

むねじやともあれ人めのせきへあきらめましたといふつらさ
「(二ウ)

十二 上るりいりいきなどゝいつ 下

上るりいりいきなどゝいつ 下
「(どゝいつ) はるかぜにそよとあがりしあのとんひだこ「(と
み本「(むしうり「(どうでにやうぼにやもちやさんすまへわたし
ばかりがほれていてかそのへんじおまこ?ぎもおもひ」ひとのし
やくりにやのりわせぬ「(一オ)

「(とゝいつ) きいてよいのがやまほととぎすふみのへんじやこ
とのねも

「(とゝいつ) はるはことさらまたきもかはる「(???)「(とう
ちうすころくおたから／＼／＼「(むめのはる「(たからぶねこくは
るかいによいはつゆめ?三つぶとんへんてんさんとそのふしのは

なのにしきのかきりやくなみのりいでしきち／＼／＼と「ふなぞ
こまくらでふくのかみ「(一ウ)

「(とゝいつ) つとめのならいぢやとわいゝながら「(富本「(あ
さま「(いやなきやくにもひよくござおもふおとこのやまとりの「
おもわぬおかたにみをまかせ

「(とゝいつ) 二世とちがいたいじなおまへ「(ときわづ「(お
はん「(なからへいよとはそりやとうよくなわたしやしんでもおま
へよりいとしいものかあるうかいな「わかれりやこのよによふは
ない「(二オ)

「(とゝいつ) わかれのつらさにかみかきあげて「(ときわづ「(し
のふうり「(二世のかためとたきしめてつい手まぐらのヲ、そゝけ
かみ「あゝもしたやあけのかね

「(どゝいつ) ほれたわたしがうるさいならば「(??本「(おそめ「
そんなものよないゝはけおそれよりわしがいやならば「ほどよく
うまれてこぬがよひ「(二ウ)

十三 しんないいきどどいつ

しんないいきどどいつ 上
馬喰町三丁目

吉田屋小吉板「(一オ)

女こゝろのわしやひとすじに「(しん内「(いだ八「(すいたがい
んぐわつかのまもそばはなるゝがいやまして「どうまあかへして
やりやしよぶか

けさはかへつてまたきなんせと「(しん内「(あはしま「(いふた
は二人りがいつまでもかいとふしたいこゝろゆへ」といふてわた
しをのせるきか「(一ウ)

かほではらたてこゝろでないで「(しん内「(明からす「(あんま
りむごいなさけになやこよいはなれてこなさんか「またあふしあ
んがあるかいな

おまへがしんでもてらへはやらぬ「(しん内「(小さん「(なかし

やんせ／＼そのなくなみだはふか川へながれて小さんがくんでのみや」わたしやこにしてさけでのむ」(一オ)

なにをくよ／＼さけでのみな」(しん内)(明からす)どふなるのぞながらへてわがなきあとで一ぺんの系かうをたのむさらばやと」いふをとりつきしのびなき

ほんにおもへばおまへとわたしや」(しん内)(つな五郎)いふはいまさらずきしあきはつの一座のつれのうちおまへのなりふりあいさつが」すいたがふたりの身のつまり」(二ウ)

しんないあだもん句どゝいつ 下」(三オ)

おまへをおもふてくりことながら」(しん内)(らん長)おやにそひねのゆめにさへ見もしりもせぬ人なかへうられくるわのうきつとめ」たよりにおもふはぬしばかり

どふしたふかいあくゑんじややら」(しん内)(明からす)そなたもともといゝたいがいとしそなたを手にかけて」どふしてわかれていかりやうか」(三ウ)

あふた初会にすいたがいんぐわ」(しん内)(つな五郎)のぼりつめたる二かいのはしごおやにさかるふこの身のうへ」みんなそなたがあるゆへに

せけんかねたるわたしがくろう」(しん内)(らん長)おまへのそふしたかんしやくはいつものくせとはいゝながら」すこしはめをかけてくださいんせ」(四オ)

おまへをあんじて神様へしほだち茶だち」(しん内)(あわしま)わづか四月か五つ月にきつうやつれさんしたのう」わづらふてもくだんすな

はりといきじとみなくみわけて」(しん内)(いた八)おとこの身でさへいゝにくいにこうしたつとめのそのなかで」みんなそなたのくめんづく」(四ウ)

十四 しん板色里たのしみどゝいつ
しん板色里たのしみどゝいつ」(一オ)

ほれていれどもしらをばきれといつかのろさがあらわれる
いまさらきれては人めにすまぬこれをさつしてくださんせ
あだな事したそのいゝわけにぎりと名がつきやすむかいな
やがて見さんせおまへのそばでまへだれたすきにはりし事」(一ウ)

むねに手をあてつまらぬものとおもひながらもきれられぬ
たらちねをかいてだいじなお前をすてゝほかにうわきがなるふかへ

そばにいてさへ恋しいものをましてはなれてくらすもの

わたしやながれのつきゆきはなよふりつてらしついるにぞむ」(二オ)

さけがいわせしむだとはしらずまことあかしてはづかしや
なまじなまかに過しの御げんなをもおもひがますわひな
ういもつらいもこゝろにこめて人にかたらぬわがこゝろ

どふでこぬきとおもふていれどもしやとすて文やつて見る」(二ウ)

さきにおもわぬ恋じにまよひほんに身でみがばからしい
ひとをたのめばせけんへしれるいつそうちあけはなそふか
ぐちなおんなじやはてやかましいおれもおとこじやむねにある

ア、もふくやしやねんきがなくはしよふもよふもあらふのに」(三オ)

ぬしのねがほをつく／＼ながめこふもかわゆるなるものか
たつたいちどの御けんにまよひうわさするのむねのうち
いちどや二どではさんみやふさがしとてもくるならす衛ながふ

あだにさんすなせけんの人がうわきものじやといふわひな」(三ウ)

十五 新板おつこちどゝいつ
新板おつこちどゝいつ 上
八丁ボリかじ町

松吉板「(一オ)

ぬしはふかくさこいぢのさとてせう／＼なりともねてみたい
あんだんのもしあぶらもなたねの花よむかしをわすれずとび
こむあのこてう

ゆふぐれにいぶすかやりがわしやないならばおつるなみだてう
きなたつ「(一ウ)

とかげくうかやあのほとゝぎすひとみかけによらぬもの
かたやまこかけのわしややぶうぐひすよおまへはしるまいない
ている

ひとめしのんであらかなしさはむねでこがれてしらぬかほ「(二
オ)

いやであるふがこゝきゝわけてしんぼしてくれいましばし
しのぶこいじとよるふるゆきはひとめしらずにふかくなる
いちねんといへばひとくちまつ身のつらさいつかねんきのかし
くぞへ「(二ウ)

おつこちどゝいつ 下「(三オ)

いさむなかにもひとりで??なぜといわれてにがわらひ
ひとのはなとてながめてゐたらいまのくるふはせまいもの
いまはかれきでつないでいましていまにさきたやぶぢのはな「(三
ウ)

十六 新板江戸じまん富家どゝいつ

新板江戸じまん富家(ふうか)どゝいつ 上

松坂屋吉蔵板「(一オ)

これほどわたしに三つ井(駿河丁)だそなた白木(通吉丁目)
お江戸にまたとない

もふひとめあいたたい三谷(両替丁)エ、なつかしい田庄(長谷
川丁)へこがれてしねばとて

大丸(大伝馬丁)のかねやしんしよも何いるものか鹿嶋(新川)
そなたとそへばいゝ「(一ウ)

たとへ野ゝすへ大嘉(??丁)の住居わたしや内二而播新(金吹
丁)ごと

千波(??田丁)わたしもつとめのこゝろいまじや客とはおもや
せぬ

わたしや豊田(芝三田)から女房こゝる柏屋(本丁)つぱり客
のきか「(二オ)

ての字(八丁ぼり)さげてもおまへとふたりあすはどふして鴻
儀(茅ば丁)てと

川村(???丁)おれゆへくろうをするとすてこ鳥羽屋(三十
間ぼり)にいわしやんせ

伏見屋(佐久間丁)ゑんで?ふと馴染たはやく内田(昌平外)
といわれない「(二ウ)

新板江戸じまんこゝるいきどゝいつ「(三オ)

小津(伝馬丁)ナこといつチャわたしにこまらず計り田畑屋(伝
馬丁)情もかけさんせ

分銅(かうじ丁)見そめたこの胸のうちや岩城(かうじ丁)は
ゆふに升屋もの

ほどゝいゝ何につけても坂重(かうじ丁)の事が酢屋(??丁)
夕おかたとひとかゆふ「(三ウ)

越前屋(市ヶ谷)二年三年あわねばとても伊坂(新ぼり)こゝ
るもかわるまい

豊嶋屋(鎌くらがし)さしきそのことのはは四方(いづみ丁)
やうはきでいやせまい

じれつたいてつほう玉か矢野ゆくやうに富田屋(三十間ぼり)
きたいぬしのそば「(四オ)

鳥渡おみあのや恵比寿屋大黒(石丁)三のやうにおまへとくら
したい

くろう駿河屋わたしのねがゐ川喜田(伝馬丁)おもふぬしのた
め
伊豆蔵(本丁)にいまはどふしていやしやんすやらいつそあ伊

藤(下谷)松坂屋(四ウ)

十七 しんばん江戸めい所浅草八けい字あまりどゝ一ぶし
下

しんばん江戸めい所浅草八けい字あまりどゝ一ぶし 下(一オ)
てきはおゝぜいみかたはひとりぬしはつれないふたこゝろ
さけといるとでおもしろさうにみへてこゝろにらくはない
かこのとりでもじせつをまてばそらははをのすこともある(一
ウ)

たとへどのよにいはるゝともしんぼするのがぬしのため
たよりなきみにたよりができてもとめましたわよひとくろふ
おまいばかりにくろふはさせぬまかりちがへばひきまみげ(二
オ)

十八 新作きも玉都といつ

新作きも玉都といつ 上

八丁堀水谷丁

松坂屋板(一オ)

せうちして人におらせるあのやゑざくらぎりほどせつなひもの
はなひ

はでないろかにさいたるはなはよるのあらしにちりやすい
たてしびやうぶにふたつのまくら世事とまことのいれどころ

(一ウ)

おもふこゝろをめかほでしらせいつかほに出るはなすゝき
かみをかけたるきせうをすてゝこゝろがらとてくろうする
人のはなしにうはさをきいてむねのくろうつがなをまさる(二
オ)

おやといゝかけふときがついてあたり見まはしわらひかほ
あふてひとことはなしもできずひとめありやとてたにんがほ
こいのてならひいつかきそめてふでにいはせるいろはもじ(二

ウ)

新作きも玉都といつ 下

八丁ほり水谷丁

松坂屋板(三オ)

人のうはさやしやくりにのつてうたぐりやしやんすもほどがあ
る
わすれやうとてむり酒のめばよふてなをさらおもひ出す
きざな小うたやうはさがきこへねてもねつかぬむなさばぎ(三
ウ)

三味線のいとに三筋のねいろはあれどおもふこゝろはひとすじ
に
きたならばあやませふと思ふていたにさかねぢをくはせて私
にあやませ

うらみいふのもすねるもなくもみんなおまへがさせるわざ(四
オ)

ぬしのたよりとかどあけみればまたもくいなたゝかるゝ
人目のんでくるぬしよりもそれをまつ身はなをつらひ
かすみたなびくあのふじのねもはれてうれしきあさげしき(四
ウ)

十九 しんばん客人女良しゆかけ合文句都々一ぶし

しんばん客人女良しゆかけ合文句都々一ぶし 上

茶吉板(一オ)

やめた酒てものめならのをかみのばちでもいとやせぬ
どぶぞあいきやうこぼさぬよふにつげはうちばのめはちふん
たよりすくなのわたしがみをばぬしがみすてりやしぬばかり
(一ウ)

なにをいふにもとしわかばゆへいるけついたら秋がくる
みればみるほどきれいなあやめ根からたゞせば水くさし
どろ水とせいといやしましやるな蓮のはなさへどろにさく(二

オ)

なびく心でわれおちにきにあきかぜふいたかおみなへし
ぬしにあふよはおしろいの花よるはひらいてあさしほむ
いけてみしやんせ小ぎくの花をぬしの水あげでとくにさく」(二

ウ)

しんぱん客人女良衆かけ合文句都々いつふし 下
松坂屋板」(三オ)

二十 新板せたいどうぐはらくたどいつ

新板せたいどうぐはらくたどいつ 上

馬喰町三丁目

吉田屋小吉」(一オ)

なべもておけもさげましよほどにかまにやなさをかけなんし
どなべすりばちかんしやくおこしわんもちやわんもむかふづら
しやくしなりやこそおはちのなかでつらいつとめのめしをもる」

(一ウ)

ぜんにうつわのかづ／＼あれどはしかなければたべられぬ
ぬしはちやせんよわしやくびしやくよさぞやちやぶくろつれし
かる
ひんぼどくりはかねてのせうちなかのむまいがわしやうれし」

(二オ)

かわいごとくにとびんをかけてあつくなるほどおちやにされ
こふこなりやこそはちにもはいりねずみいらすのかこいもの
やぶれせうじのそのよのつらさろくにふすまはないわひな」(二

ウ)

道具づくしどいつ 下」(三オ)

かさねだんすはとだなの女房ふかれはたかれゐるわいな
かわいものじやよだきねのひばちしかみひばちのにくらしさ
やすひ女郎衆はいしうすちやうすまわし／＼てよをあかす」(三

ウ)

ばせうちやうちん手しよくをやめてふらになるとはなさけない
うちのやくわんがどぶこのゆでもみづにあわつにいられふか
ちよくでゆこふかめかごにしよふかいまはちやわんのあとやさ
き」(四オ)

ふとんかぶるはこたつのやぐらわたしやおまへをはらやぐら
はさみばこではわしやなけれどもほんにおさきのかたおもひ
ゆみやてつほうはまとふをねらふしりをねらふはかつぱか」
(四ウ)

二十一 新板月雪花撰文句どいつふし

新板月雪花撰文句どいつふし 上」(一オ)

よふ／＼としのびあければらんまがしらむぢれてかみきるふさ
よぶじ

まゝならぬ世とあきらめてもかほみりやくちをゆうて心でない
ている
あつい御げんにまた御いけんもきゝいれましたがきれられぬ」

(一ウ)

恋やみでしよくものんどへはとふりはせぬがくいづきたいのは
ぬしのかほ

いつゞけのつもるはなしにけさしきかへてへやのしきへのたか
いこと

にくい人だとくちではいへどぢつはいのちもいとやせん」(二
オ)

ない
ないていずともふみでもかいてともたちをたのんでよぶがよい
ともたちよふたのめばみなうはのそらせくきはあれどもぢつは

しみ／＼とたいてねもせではたからせかれ」(しん内)どこに
とふしていさんすやら人のうはさによしあしをきくにつけてもき
くるふはつりのり／＼てしやくとなる」とがない子しよくにやつあ
たり」(二ウ)

あきのそらかよ身をさらしなの「(しん内) うつりやすしよ木はもみじ」くもなくはれて月のゑん

ふかくなるほどだがへのこゝろ「(しんない) はだとノはしらゆきのもとにきゆるもいとやせん」つもるおもひもねてとける木になる此のみをまた白梅の「(しんない) あいたみたさがとびたつばかりかこの鳥かやうらめしや」とめてはつねをたのしみに「(三オ)」

しのゝめにわかれせわしきみおくるすがたきりがじやましてまゝならぬ

としがちがをが女房によぼがあつとじやふをたてずにおくものが

きゝわけぬいかに年はがゆかぬとゆふてほかにおとこのないよふに「(三ウ)」

きゝわけましたがわしやきれられぬたとへなわめにかゝるともほつとためいきなみだとともに「(しん内) なんのいんがでこのよふにいとしいものかさりとては」(とゝ一) 身につまされて一とりごと「(四オ)」

おろすわさびとこいじのいけんきけど? ほどなみだではだどノをだきしめおふてこふもかわゆくなるものか
おもいだしはたでちろりとかんづけられてはづかしそふにかほにそで「(四ウ)」

二十二 新板どゞいつぶし

新板どゞいつぶし 上巻

八丁ホリ

茶吉板「(一オ)」

ちる花をさためなき身とうたにはよめどさかざなるまへ春の風わけもないのにきにくせつけてかほみにやくるうでねつかれぬいろにまよいし身はとうがらしなみだにもつこゝろから「(一ウ)」

ほれたわたしがうるさいならば「(上るり) そんなそのよないゝわけをそれよりわしがいやならば」ほどよくうまれてこぬがい

人目おふけりやツイそれなりにないてぢれふすみだれかみ「(二オ)」

せきにせかれてそのうへならず「(しん内) かわいやこの子を手はなしてとふしてかたときいらりよふか」(ことば) さあノしいをしてあすはとうからおしんなねへやれノ、ねんねよほんにかわいやねがほさへ「ちやんにそのまゝいきうつし」

わらはれ草なるわしやわらぞうりすへにやきれてもなは残る「(二ウ)」

しん文句どゞいつぶし「(三オ)」

両手をくんでかんがへみれどおもひきられぬぬしの事

ほれたおかたによくにた男じつがあるやらきかまぼし

しんでわかれば此よのならひぬしとわたしはいきわかれ「(三ウ)」

さげにまぎれてうらみもいへどしらぶぢやしらけて向づら

さががさきならくろつをしたるかいもなきさのあまをぶね

いへばどうやらさいそくらしくいつまでそはづにいらりようか「(四オ)」

せかれてゐる身のまたこうしさき「(新内あはしま) アノおまへは丹七さんかとおどろけばほうばい女郎もやばなかんすいつけたばこもわれかちになみだとともにかたりおふやりてのすぎがこいたかくまた一トところへよりあはづとてんノにはなれていやしやんせくせのわるいとわめかれておとはゝかほみてうれしいやらまたかなしさがましたやら」しれてかむるにやつあたり「(四ウ)」

二十三 新もん句彙入どゞいつ

新もん句彙入どゞいつ

馬喰町三丁目

吉田屋小吉板「(一オ)

はねをつくばのけしきにそへてむすめざかりのふじびたへ

おもふおかたにたゞあを／＼とこゝろのたけやまつかざり「(一ウ)

すこひやうだよみかつきぐしをさしたやなぎのあらひがみ

ほれたほのじとつひなきそめてうめにはなれぬにほひ鳥「(二オ)

くらうするのはてんからかくこいきなていしゆをもつからは
いろであらうとおほきにおせわおかやきもちもほどにしな「(二ウ)

うはきこてふがすみれをすてゝつまにまよふかさくらそう

ひとのうはさもひちじう五日たつかたらぬにきれことば「(三オ)

いまじやまじめなふうふでゐれど「(清元松影) わつちや是でも

水道の水がしみわたつたるありがたきお恵みうけてのぼり船「こ
とば」モシふねがかしぎやす」トいはれたこともあつたのさ「(三ウ)

ぎりもせけんもなにしらかみをよごすきしやうもほれたいぢ

おやにすはれるわたしのつゆをとうぞおまへにすはせたい「(四オ)

こんなむすこをこせへておいていまじやおやぢはやばをいふ

うめがさかねばこんどははだかいちばんうまくあけのはる「(四ウ)

二十四 しんもむく佐和里都々一 義太夫いり

しんもむく佐和里都々一 義太夫いり 全

福亭三笑作「(一オ)

やぶれかぶれと身は三味せん「(安達三ノ切) お願申奉る今の

うき身のはづかしさ父うへや母さまのおきにそむきしむくひにて
二世のつまにもひきわかれなきつぶしたる目なしどり」くるふす

るはづあやのばち「(一ウ)

角力取りをば男にもてば「(川川の段) 江戸長崎国々へゆきや
しやんすりや?の留守は猶更女気のひとりくよ／＼ものあんじ
夫人にけがないやうにといのる神さん仏さん妙見さまへせう?
ものど?しやんして顔見るまで」片時やすまぬわたしが氣「(二オ)

?たなるこゝろはみぢんもないが「系こふしやうとておすがたを
系にはかゝせはせぬものをたましゐかへすはんごんかうめいぐは
のちからもあるならばかわいとたつた一ト言のおこ系かきゝたい
／＼と系そうのそばに身をうちふし」とうもまことゝおもはれず「
(二ウ)

たゝかさんせよおまへのからた「(先代萩の段) なんともないと
じうめんつくりなみだはいづれどおさなきにほめられたさが一つ
ぱいに「ちよつと手つけにめをまはし」(三オ)

秋の夜風の身にしみ／＼と「(いざり?の段) つきそふわたし
は女子の身ちからにおもふ主の身はこしひざぬけてあしなへとな
りやつれたるふうぶがるるふ」たれを松むし音もほそく「(三ウ)
のぼりつめたる二階のはしご「(寺子屋の段) あすの夜たれか添
へちせんらむかゐ?しるおやこゝろつるぎと死出のやまけこへあ
さきゆめみしこゝちして」いまさら目がさめあきらめた「(四オ)
おまへの浮気を知りつゝほれて「(紙治) なかしやんせ／＼その
なくなみだがしゝみ川へなかれて小春さんくんでのむわいな」り
んきするのめぬしのため「(四ウ)

およばぬ恋路と知りつゝほれて「(すしやの段) たとへこがれて
しぬればとて雲井にちかきおん方へすしやのむすめがほれらりよ
か」とはいへ女房のあるおかた「(五オ)

元ゆひの切れて仕舞ば根も葉もないが「(白木屋の段) そりや聞
へませぬオ三さんおまへとわたしは其中はきのふやけふの事かい
なやしきにつとめたその内にふつと見そめてはづかしい恋のいろ
はをたもとから」聞ばき?腹がたつ「(五ウ)

娘こゝろのたゞ一とすじに「(野崎村の段) あんまり逢たさなつ

かしさにくわへおんさまをかこつけにあひに北やらみなみやら
きて見りやつれない事はかり」(六オ)

人のいけんも火水のせめも」(琴せめの段)さらばといふ間もな
いほどにせはしないわかれ路はむかしの?ノ引かへて木綿ノ
とおちぶれし」思ひきられぬこいの意地」(六ウ)

切るに切られぬ悪えんなれば」(帯屋の段)わたしも女子のはし
じやもの腹もたつしりんきのしやうもまんざらしらぬじやなけれ
どもう??とのごにきをのませわづらひでよふかと」どうかし
なよくするがよい」(七オ)

人めしのんで恋路の関を」(新口村の段)それはうれしうござん
しやうさりながらわたしがとゝさんかゝさんは京の六条じゆずや
町」こへてとうげの又くろう」(七ウ)

二十五 しん板はうたおもしろどいつ

しん板はうたおもしろどいつ

本金」(一オ)

月雨やある夜ひそかに恋路のやみに主の御けんを松の月

かはる枕の寢覚のところに寝ぐらさだめぬ鷹の声

おれもつらあてとは思へどもみかへる女がどふもない」(一ウ)

しみノ今日しは身につまされておちぬしあんもこひのぐち

水の月手にはとれぬとあきらめなからぬれて見たさの恋のよく

しみノけふ日は身につまの恩どうでも女郎はかはぬ?」(二オ)

晴天帯紐得心津久伝堅結之恋乃?也」(はれておひひもとくしんづ

くでかたくむすびしこいの?や)

東世主人題」(二ウ)

本てうし

君はいまこまかたあたり」川竹のうきみは風の柳かないやなきや
くにもひよくこさおもふをとこのやまどりのわかれのつらさにそ
でひきたばこほんにくがいはまゝならぬ」ないてわかれしほと
ぎす

とゝ一

(本てうし)

をとおおもへは身をすりばちのむけんちごくもいとやせん」(三
オ)

もとうた

(三下り)

わか恋は住吉うらの夕げしきたゞ青ノとまつばかりこれがこひ
やらなさけなや

住吉から

同

こひ人はおばすて山の夕げしきたゞちらノと水かゞみとこにす
むやら秋のそら

同

同

わが恋はいやノむかふ夕げしやうたゞくよノとなくばかりこ
れがとゞかぬなさけなさ」(三ウ)

二十六 新板十二月都々一

新板十二月都々一 上」(一オ)

あだなむすめにうはきなとしま」(常磐津)はるははねつく手
まりうたひとごにふたご身はよをしのぶいつかむかしのさゝめ事
なんのわすれふやくそくを九つ此よ」さきの世までもかはりやせ
ぬ

初午のきつね女郎しゆについばかされて」(常)かよひなれた
るしゆじやかのゝつゆふみしたくじゆんそくはふたへばなをのま
へわたる」大もんぐちをしのび入引あいづのしはぶき二つ三つ」こ
れきたぞやきたはいのふと」おこしりではあるまいし」(一ウ)
やなぎしまだのみやうけんさまへ」(常)手をひきあふてこの
みちをめうほうれんげけふはまたあの子をいそぐめうとづれゆめ
のうきよの恋かぜにちりゆくはなやむめわか」しぐれざくらの

なみだあめ

ふか川へしほがさしみであの初がつほ(富本)かしのさうば
はきなかでもまけぬ江戸つ子すいどの水にあらひあげたるいけた
このいきでいでもの見世さきへ「ふねがつき夜でぬしのかげ」(二
才)

四つにだきしめ手あしをからみ(常)かはづと見たてしやう
ノゝがまたのときけばこわけれどいろにはうちわもあげづめのひ
げが行月にたつかとときのせきもりがひつかけた酒のしるしにあら
ね共谷風ノゝ小の川ノゝ「しやうぶ五月の家根にさす

あけりやおとゝしわかれたひこに(清元)めぐりノゝて大や
まのせきそんさまのひきあはせおもへばほんになむきめうてうら
いと「ふかいゑんではないかいな」(二ウ)
浄るり十二月よし此 下(三才)

いるがみときけばまよふがうき世のならひ(新内)かつてな
ことのぐわんにぐわんだいしさんのおみくじも」とる手にすがり
てかへしやせぬ

十五夜のつきのあかりですがたを見れば(新内)おとわはか
ほ見てうれしやら引またかなしさがましたやら」はれてあはれぬ
こひのやみ

きくづきはなのよし(三ウ)わらにわかるときに(新)な
かのてうで見かけたのあげやまちへはいらんしたのどこの二かい
でこゑがする「うはきもたいがいほどがある

ゑびすかうおめでたいよりおかほが見たい(新)どこにどう
してゐるとてもかはるわたしじやないわいな」それにじやけんな
ことばかり(四才)

とりのまちならくまににかけて(新)わしややりはせぬはな
しはせぬころしておいてゆかんせと」のろげんかをして見たい
としのくれより日のくれるのを(新)まつ身になればはてし

なくもはや見へそなものじゃがとのびあがるうちとふらんす(同)
エゝモぢれつてへよ」よぶはたけやのわたしぶね(四ウ)

二十七 新文くゑいりどゝいつ

新文くゑいりどゝいつ

馬喰町三丁目

吉田屋小吉板(一才)

なかのいゝはづこれ見てくんなんどのはしさへふたりづれ
しかのつまこひつまどもにまれてひとりねるよのうきまくら(一
ウ)

こゝろのおにゆり人にはしれぬすがたやさしきかほよばな
こむすめとらへてむりおうぜうにあさひなさぶらうのもんやぶり
(二才)

かぜふかばおきのしらなみたつたりゐたりもしやぬしさんがきた
のかと

ふるいたとへのひなたのすいくわあつくなりたやひぬきれん(二
ウ)

なさけなつのゝをしかのつよそのつかのまもわすられぬ

さけのとがゝとりやうけんすればまをとこされてもすてられぬ

(三才)

おやのゆるさぬえにしとまゝよ(義太夫杉さかや)ふうふのや
くそくほしあひにかさゝぎならぬおだまきをちよのなかだちとり
かはし」おもひおもふたなかじやもの(三ウ)

あるよひそかにさみだれすがたうれしいしゆびをまつのつき
にようぼたとへばとこのまはしらいるはいけばなたうぎもの(四
才)

おんばはおあひだわらかしやがるよひろくてよかつたことはない
よけてあをたにこかるゝほたるれんじまできてかやのそと(四
ウ)

二十八 どゝ一ぶし心の花実

どゝ一ぶし心の花実(一才)

これほどおもふてもしそれれずはつちにおもひのねをのこす
いやであるふがこゝきゝわけてたらぬわたしもたつよふに
ほかへいきたいおまいのくせはつきやいだといやすむのかへ
ほれていれやこそないことまでもおもひす「してあんじられ」

(一ウ)

あいた見たさはとびたつばかりかこのとりかへなさない
ぬしのこゝろとたごとのつきよとこへまことがうつるやら
たつたひとつのきのもちようてせけんせまくはたれかした
ふかいなかぞへこふまでされておもいきられぬきがしれぬ「二
オ)

いうてくようかいわすにおこかさきのようすを見てのこと
おまいおもへばよのめもねずにとわづがたりでなきないり
さけはのんでもおとなしければわたしのほれたもむりはない
あいたさこらへているみのつらさつのりやじびやうのしやくの
たね「(二ウ)

二十九 どゝ一ぶし心の花実

どゝ一ぶし心の花実「(一オ)

とぶざあわねばすがたもかほもかわるものかへこゝろまで
いまにもわからぬなまみのからだじせつまてとはきがしれぬ
たまゝしゆびしてあふみじやないかはらちがほせずきげんよ
く

思ひきるふと日にやいくたびかおもやつのりてをます「(一
ウ)

たとへあわすとかほ見ぬとてもなんでいまさらきれられふか
こぼれまつばのあやかりものよかれておちてもみやうとづれ
たつたひとばんあのはりやいにあわざだにんでくらすもの
人もほめるしわたしのきでもすいたらしいとめにみへる「(二
オ)

きれでみやがれたゝおくものかこわくないよふにばけて出る

いかにいづもがとりこみじやとてむすびちがいのことばかり
あふたゆめみてふとめをさましどちらむいてもよぎのそで
ぶたれながらもそのてにすがりなぜかじやけんなきにほれた「

(二ウ)

すてゝみやがれたゝおくものかくさをわけてもたづねだす
人にとわれてたゞうつむいてなんといおふと目になみだ
ほつとためいきこゝろのたづなゆるすまもなくこのしまつ
つとめするみはおきのふねよろくなよふでもくがまさる「(三
オ)

あい見ての後の心にわしやくらぶればうわきなこゝろはもたれ
ない
つきにむらくも花にはあらしまゝにならぬがよのならぬ
まぎらそふとのむりぎけすこしすかぬおきやくについあたる
けいせいにまことないならしるに成てほれて見せたいぬしひ
とり「(三ウ)

三十 東都めいじんかきぬきもん句こゝろいき新版都々い

つふし

東都めいじんかきぬきもん句こゝろいき新版都々いつふし

若連

満留吉「(一オ)

はるさめにそよと目がさめきくつめびきでおもはずぬらすはま
くらかみ

おためごかしてできたといわせとぶざかるうかにくらしい
しよてのあさぎもあいかさなりてこくなりやしつこくなるわい
な
ういたはなしをしちやいるけれどむねにくがありやわらはれぬ「

(一ウ)

人のこゝろはかわらぬものときまればじせつをまちもする
恋もむじやうにかわらぬうちとさとりすくしてこのしだら

きれておまへはしゆつせをせうがたれをたよりにわしはする
のめばたまにはわすれもせうがしらふなわたしにひまはない」
(二オ)

やりくりがつきりやわたしをまたぶちたゝき」(コトバ)「コウ
吉やかぶでかゝあをいじめるのかそんなことはやめにしておいら
のうたをきくがいゝよ(そゝり)いまなるかねは三井のかねこゝ
ろはやばせとおもへともねつからさきがいし山であはづにぬれる
が夜るのあめ(言)「ヲヤ権さんそりやアあみ八けいだの」そうよ
「おいらがうちは七けいだからけんくはができる」そりやア又な
ぜだ」ぜゝがないからこのしだら」(二ウ)

三十一 東都めいじんかきぬきもん句こゝろいき新版都々いつふし

東都めいじんかきぬきもん句こゝろいき新版都々いつふし
若連

満留吉「(一オ)

はるさめにそよと目がさめきくつめびきでおもはずぬらすはま
くらかみ

おためごかしてできたといわせとふざかるうかにくらしい
しよてのあさぎもあいかさなりてこくなりやしつこくなるわい
な

ういたはなしをしちやいるけれどむねにくがありやわらはれぬ」
(一ウ)

こふしたつとめの身でさへやけるしるふとのおまへさんはむり
じやない

しやくがさしこむもつきゝましたわかればなしはむだなこと
みちならぬことじやよそふとおもふちやいたがすいたがいんぐ
はでせひがない

おたがひにきをしりやむりだとしりつゝぐちをいふと思へばな
をかわい」(二オ)

ほれてくらうはせうちでするにいけんするとはきがしれぬ
むりを手にしてあきさせやうかそんな手でゆくわししやない
うちしやせかれるそとではなぶるたよるおまへにやすねられる
つらいとつめはつらくはないがしのんでかよふがつらからう」
(二ウ)

三十二 まどの梅みさをどゝいつ

まどの梅みさをどゝいつ 上

馬喰町三丁目

吉田屋小吉「(一オ)

むめもやなぎもみなそれ／＼にこひのいきぢのあだくらべ
じつもふじつとなるみのつらさおくるちや屋にもぎりがある
たつをひきとめマアきかしやんせいちにもちつきまつのうち」
(一ウ)

おくるちや屋でもむねきなしかたあのこによばれてなるものか
はるのかすみも三すぢをひくははなになにかれるこゝろいき
なごりおしげにみおくるかほへつゆかなみだかあささくら」(二

オ)

ふるゆきもふむもおしひかふまずは人がとふてくれまひこのけ
しき

花のけしきもふりつむゆきもこゝろ／＼のめのながめ

どてのさくらをまたよざくらとさけがのりきのさんやぼり」(二
ウ)

まどのむめみさをどゝいつ 下」(三オ)

このごろはなみだもろひとわらはせぐせがつゐてふさぐもぬし
のこと
きゝわけがなひと我みでしつてはるれどおもひきられぬこひの
よく

はるののにおもひすぎなはおまへのうはきあんじこゝろのつく
／＼し」(三ウ)

とちはもとよりせけんはなをもひろくさせたひこちの人

おそまきながらもしんぼうさんせついふてなみだにむせかへり
ゆきのはだへにさくらのめもと月にいくらとうはさする「(四
オ)

つたかつらからみつくほどおもふてぬれどぬしのこゝろにはち
もみぢ

ひきしほにこへもかすかなあのはまちどりとふくなるみのうみ
になく

いちのゑんぎのはまゆみおかめはずむてまりのみやげもの「(四
ウ)

三十三 伊呂波しり取どゝ一ぶし

伊呂波しり取どゝ一ぶし 下(ママ)

八丁堀 松坂屋板「(一オ)

わ わたしやこれほど思ふてゐるにかうもじやけんになるものか
か かみやほとけにねがひがとゞきけふのこげんのうれしさよ

よ よいにしのばせやうノノのことであふてかへしてほつとした
た たとへのゝすへ山のおくまでも手に手を取あふてふたりづれ

(一ウ)

れ れいのやぼめがまたしげノノにうるさいことだよどうしやう
ぞ ぞ

そ そふたゆめ見てついおこされてあとをみたさにはらがたつ
つ つきにむらくもはなにはかぜよぬしにあふよのあけのかね

ね ねてもさめてもおまへのことをおもはぬ日とてはないわいな

(二オ)

な ないてわかれてついそれなりにひとりぬるよのあだまくら
ら らくなせかいにくがいのつとめしはしわすりよと酒ものむ

む むねにしあんはさだめてあれどぐちがこうじてものおもう

う うはきなおまへにしみノほれてわたしやあはびのかたおも
ゐ「(二ウ)

や やがてふうふといふてはぬれどむねのけむりがあさま??

ま まゝにならぬがうきよといへ?あまりしんきとちやわんざけ
け けさもけさとておまへのうわさあんじすこしてものおもふ
ふ ふかくなるほどおもひがますよはやくゆきたやぬしのと「
(三オ)

こ こひしノとおもふてあた?ゆめじやないかやぬしのこえ

ゑ ゑんのつなかやたよりかありてぬしのところへふみのはて
て ていしゆきどりのぬしよりほかにうはきところかなんのまあ

あ あいのおさいとのむさけよりもふたりねざけのおもしろさ
(三ウ)

いろはしり取どゝ一ぶし 下(一オ)

さ さいたさくらもみだれりやちる?しんぼうさんせやちらぬさ
き き

き きづよいおかたとうらみつないつおつるなみたのそでのつゆ

ゆ ゆうべあふたにまたかほ見たくふみにおもひをふうじとめ
め めかほしのんでうきなをたてゝまよふふたりがこひのやみ

(一ウ)

み みゑもかざりもなくほれぬいてぬしのことばかりいひくらし
し のびあふよはみじかふてならぬにくやよあけのかねのこゑ

ゑ ゑきもないことさきぐりをしてぬしをあんじてものおもひ
ひ ひとめしのふははじめのうちよいまじやひとめもよのぎりも

(二オ)

も

せ

す 京「(二ウ)

《二ウは判読不明箇所多》

三十四 伊呂波四十八文字しり取文句都々いつぶし

伊呂波四十八文字しり取文句都々いつぶし 上

八丁堀岡崎丁 あづま清吉板「(一オ)

い つかふたりがめうとにならば手なべさげてもうれしかる
ろ うかづたいのしのびのこひじもはやしれたらまゝのかは
は たかにんきやうとなるわしがみもみんなおまへがかはいさ
に にくやからすでモウきぬ／＼とじつとひきよせかほとかほ
「(一ウ)

ほ ほんにおまへもやきもちぶかいおぼへもないこといゝならべ
へ へんなうはさをわしやきくたびにおもひすくしてぬしのこと
と をざかるのはすへさくはなよしんぼさんせやちとのうち
ち ちはがこうじてせなかとせなかあけのからすがなかなおり
「(二オ)

り りんきせまいとたしなみながらなぜかこゝろがやすまらぬ
ぬ ぬしのこいかとまただまされて出てはみんなにわらわれる
る すをめぐけてくるまをとこもねこのしやうやらぬすみくひ
を おもひおもはれかうなるからはぎりもせけんもまゝのかは
「(二ウ)

伊呂波しり取どゝ一ぶし 下
東清はん「(三オ)

わ わたしやこれほど思ふてゐるにかうもじやけけんになるもの
か かみやほとけにねがひがとゞきけふのこげんのうれしさよ
よ よいにしのばせやう／＼のことであふてかへしてほつとした
た たとへ野ゝすへ山のおくまでも手に手を取あふてふたりづれ
「(三ウ)

れ れいのやぼめがまたしげ／＼にうるさいことだよどうしやう
ぞ そふたゆめ見てついおこされてあとをみたさにはらがたつ
つ つきにむらくもはなにはかぜよぬしにあふよのあけのかね

ね ねてもさめてもおまへのことをおもはぬ日とてはないわいな
「(四オ)

な ないてわかれてついそれなりにひとりぬるよのあだまくら
ら らくなせかいにくがいのつとめしぼしわすりよと酒ものむ
む むねにしあんはさだめてあれどぐちがこうじてものおも
う うはきなおまへにしみ／＼ほれてわしやあはびのかたおも
「(四ウ)

三十五 いろは四十八しり取どゝいつ

いろは四十八しり取どゝいつ 上

玉つねはん「(一オ)

い いか二人りがみやうとにならばてなべさげてもうれしかる
る ろん？ないぞいいやじやといふがそめてゆくぞいこのしらは
は だかにんきやうとなるわしがみはみんなおまへがかわいさ
に にくやからすがまうきの／＼でしかとだきしめかほと／＼
「(一ウ)

ほ ほんにおまへはやきもちぶかひおぼいもないこといゝならへ
へ へんなうわきをわしやきくたひにあんじくらすはぬしのこと
と とづがるのはすいさく花よしんぼしやんせよちとのうち
ち ちわかかうしてせなかと／＼あけのからすのなかなおり
「(二オ)

り りんきせまいとたしなみながらなぜかこゝろかさたまらぬ
ぬ ぬしのこゑかと又だまされてでゝはみんなにわらはれる
る るすを目がけてくるまごとこもしれりやどきやうのさめとこ
お おもひおもまわれかうなるからはぎりもせけんもまゝのかわ
「(二ウ)

花見もとりいろは四十八しりとり掛合しんばんとゝいつ 下
両国 玉恒板「(三オ)

わ わたしやこれほどおもふてゐるにかうもじゃけんになるもの
か か
か かみやほとけにねがひがとゞきけうのこゑんのうれしさよ
よ よいにしのはせよふよのことであふてかいてほつとした
た たとひ野ゝすいやまおくまでもてをとりあふて二人りつれ
(三ウ)

三十六 いろはしりとりどゞいつ

いろはしりとりどゞいつ 初へん

杉丘画

馬喰町三丁目

吉田屋小吉板「(一オ)

い いつかふたりがめうとにならば手なべさげてもうれしかる
ろ ろうかづたいのしのびのこひぢもはやしれたらまゝのかは

(一ウ)

は はたかにんきやうなるわしが身もみんなおまへがかわいさに
に にくやからすでモウきぬノとじつとひきよせかほとかほ

ほ ほんにおまへもやきもちぶかいおぼへもないといひならべ

(二オ)

へ へんなうはさをわしやくくたびにおもひすぐしてぬしのこと
と とほざかるのはすへさくはなよしんぼさんせやちのうち

ち ちわがこうじてせなかとせなか「(二ウ) あけのからすがな

かなほり

り りんきせまいとたしなみながらなぜか心がやすまらぬ

ぬ ぬしのことゑかとまただまされて出てはみんなにわらはれる

(三オ)

る るすをめぐけて来るまを「(三ウ) とこもすこしはきがねを
するものを

を わもひおもはれかうなるからはぎりもせけんもまゝのかわ

わ わたしやこれほどおもふてゐるにこうもじゃけんにするもの

か か
か かみやほとけにねがひがとゞきけふのごげんのうれしさよ
(四オ)
よ よいにしのはせやうノのことであふてかへしてほつとした
た たとへ野のすへ山おくまでも手にてもひかれてふたりづれ
(四ウ)

(二編欠)

いろはしりとり都々一 三へん

馬喰町三丁目

吉田屋小吉板「(一オ)

こ こひしノとおもふてゐたにゆめじやないかやぬしのこえ
え えんのつなかつたよりがありてぬしのところへふみのつて

(一ウ)

て ていしゆきどりのぬしよりほかにうはきどころかなんのまあ
あ あいのおさへとのむさけよりもふたりねざけのおもしろさ

さ さいたさくらも乱れりやちるよしんぼさんせやちらぬさき

(二オ)

き きつよいおかたとうらみつなきつおつるなみだのそでのつゆ
ゆ ゆふべあふたにまたかほ見たくふみにおもひをふうじこめ

(二ウ)

め めかほしのんでうきなをたててまよふ二人がこひのやみ
み みへもかざりもなくほれぬいてぬしのうはさをいひくらし

し 忍びあふよはみじかふてならぬにくや夜明のかねのこゑ「(三

オ)

ゑ ゑきもないことさきくゞりをしてぬしをあんじてものおもひ
ひ ひとめしのぶははじめのうちよいまじや人めもよのぎりも

(三ウ)

も もとはたがひのこゝろやすだてよすねずとこちらをむかしや
んせ

せ せなかあはせてけんくわもすれどこちらむいたら明がらす

(四才)

す 糸のやくそくながノ、しいもまつにかひあるきのふけふ
京 けふはめでたくいもせもまなびかはらしやんすなかはるまい」
(四ウ)

三十七 新作こゝろいき文句四十八文字大一座しりとり都
々一

新作こゝろいき文句四十八文字大一座しりとり都々一 上
両国屋百板」(一才)

い いへばくぜつのたねとはなれどよそに花あるふたこゝろ
ろ ろくにはいふまいせけんの人が二度のつとめのこのしらは
は はかないすがたとわしやなりふりもみんなたれゆへぬしゆへ
に にくいしうちとらみつないつなみだかくしてまたしんぼ
ほ ほぐにはなるまいあのことのははすへすへまでじやうくら
べ」(一ウ)

へ へんなゆめ見てふとめをさましおもいすごしもぬしのこと
と とふざかりやこふもじゃけんとわしやなくばかりおんなこゝ
ろでせまいぐち

ち ちかいたてたよおもわぬ人にかいたきせうもときのぎり

り りかいらづめでこいじがなるかこうなりやいきじできればせ

ぬ ぬかにくぎうつおへやのいけんむだなことだよそいとげる」
(二才)

る るらうさせたもみなわたしゆへたてづはなるまいぬしのかを
ををつなはづみからついのりがきていまじやかへらぬあすが
わ

伊呂波四十八文字しり取心いき都々一 下

わ わけはこふだとこゝろのそこをゆふてきかせちやわるいのか
か かみにねがいもほかではないがはれてあいたいたゞひとよ」

(二ウ)

よ よもすからねやのひまさへつれなき人とおもいだしたるうた
がるた

た たまにきづとはおまへのことよすこしはしんぼうしておくれ
れ れんがはいかいうたよむひとまよふちやとけまいこいのな
ぞ

そ そえるゑんならいくちよかけてともにじせつのすへをまつ

つ つまづく小さいにあと見かへりてにくいながらもなでるむね」
(三才)

ね ねづみなきしてついだまされてぬしのてくだにかゝるわな
な ながめ見あかぬつきよみやみとよわりやすいはあきのそら
ら らくなむかしにさてひきかへていまはかへなきみをくやむ
む むすぶいづもむすばぬゑんかあふたしよてからこのくろ
う うきなたゞずのまもりがあらばかけてうわきがしてみたぬ」
(三ウ)

新作伊呂波四十八文字大一座しり取都々一 上之巻

こゝろいきもん句

両国屋百板」(四才)

あ あやなかせにもなびくはやなぎして見りやくがいはつらいも
の

の のきばづたへのつばめでさへもめうとぐらしてゐるものお

お およばぬことじゃとわしやしりながらそふて見たいはいこの
よく

く くみわけて見ればしうとが何にくかるういとしいをまいをう

みのおや

や やくじやなけれどたらわぬわしをむまくだましたくちぐるま」
(四ウ)

ま まゝにならねどこになるからはあさいこゝろのおよぶたけ

け けさのわかれがわしやきにかゝるつがいはなれたこのびやう
ぶ

ふ ぶかくなるほど人めのせきをこへてゆきたやぬしのとこ
こ こゝろうちとけやう／＼ねたらもはやあけがたとりのこえ
え へのあさせとわしや白波のおとにもきゝたいふみのつて」

(五才)

て なべさげてもそうきでいるにいまのくがいがなんのまあ
あ あはぬむかしにくらべてみればたよりをまつよのじれつたさ
いろは四十八文字しりとりにいきどゝ一つ 下

さ さへたつきよにじやまするくもがあるかこよひのむなさわぎ
き きてみれんで又おもいだし人にいわれぬそでのつゆ」(五
ウ)

ゆ ゆきつもどりつしあんにあまりねぐらさだめぬむらすゞめ
め めいかこうさへかほみめぐりとむりなねがいのかみだのみ
み みづにうつりしそのつきかげよとゞかぬこひじにみをやつし
し のびあふよはふさいたかほゝみせてうきななたゝぬち系

系 系んもゆかりもないしよへせじをゆうてつくるうけうのしゆ
び」(六才)

ひ ひんすりやどんすのやくとはいへどぬしにはしかけもかんざ
しも

も もつれかゝりし此くろかみをとけてゆうきにならしやんせ
せ せけんはれてのわたしが人といふをたよりに日をくらす
す すへにむすばる系にしのあやかとけてうれしいきのふ京

京 京はめでたいさて四かいなみはれてふうふのわびずまい」(六
ウ)

三十八 新版いろはうた四十八文字あんだそれよしこのふ
し

上文句新版いろは哥四十八文字あんだそれよしこのふし

八町堀七軒丁しんみち

角伝板」(一才)

いのちかけてもそはねばならぬひとにいわれし事がある

るんはないそへおま系のうわさしてはわたしはなぶられる
はらのたつまゝすねては見れどあとであやまるほれたなか
にくひなからもどづづをゆふもみんなおまへの身のためよ」(一
ウ)

ほれてほれられてあいほれとやらしぬとわかれがなけりやよむ
へるなしうちとしわんすけれどそこがよしんのあとやさき
とめてわるいとしりつゝけふもとめてきかねはほれたぢやう
ち系のない子にわる知へつけてわしをじらして嬉しかる」(二
オ)

りんきするよにいわんすけれどいわねばわたしが身のつまり
ぬしをしのばせのきばにたゝせうちのしまつできがもめる
るすをつけこみしのでくるはうまひやうても身にならぬ
をやをふりすてこきやうをはなれぬしをしとふてきたものを」

(二ウ)
新版いろは哥四十八文字あんだそれよしこのふし

角伝板」(一才)

わしがわるくはあやまるほどにすねずとこちらをむかしやんせ
かわらしやんすなおまへのこゝろうわきされてはわしやたゝぬ
よこくずまひもおまへがたよりそれにしやけんな事ばかり
たてひきつくならなまづめもはなすほれりや五本のゆびもきる」

(一ウ)
れいのかんしやくおまへの氣しつしりつゝいうのがわしがむり
そつとしのばせ二かひへあげて玉にあふ夜のみじかさよ

つよひ事をばゆうては見れどぎにあやまるほれたなか
ねんのあくのをゆびおりかぞへはやくいきたやぬしのそば」(二
オ)

なまじなま中あわぬがましよあへばみれんでおもひだす
らんきものじやといわんすけれどわたしやぬしゆへきもちがう

むすびあふたるふたりが中をさくはきじんじやおやぢやない
うそじや／＼といわんすけれどどうそものればぢつになる」(二
オ)

ウ)

新版いろはうた四十八文字あんだそれよしこの 中上

八町堀七軒丁

角伝板「(一オ)

るやなつとめもおまへがたよりたまにやなさけもかけさんせ
のむをとめたがわたしかむりかのめばおまへはしだらなし
おもふおまゑをひとりでねかしいやな御客をわたしやつとめ
くぜつするまにつるよかあけたわたしやかゑしちやきがすまぬ」

(一ウ)

やめてくんなよつきやひ酒をつのりやわたし身がつまり
まゝにならぬをしやうちてほれてまゝにしやうとはぬしのむり
けさもけさとてない所へよばれともよぶにはいのちがけ
ふでを手にもちまきがみだしてぬしの名をかきわらはれる「(二

オ)

こゝろさだめてわたしはよべどぬしがうわきで気かもめる
えてにほをあげおまへのうわきわしをおもわばやめなんせ
てれんでくだとめたはむかし今は女房よこちのひと

あいそつかしはわたしはきらゐならばすべくわかれたや「(二
ウ)

四十八文字 中下

くぜつとぎれてもふひけすぎよかみもみだれて
手まくらでやつれはてたよすやノとねひりし女のかほつくノ
とうちながめ引

かわひやくろうヲさせたやら

角伝「(三オ)

さつしくだんせわたしがこゝろぬしをたよりにこのつとめ
きしやうせぬしはほぐにもなるが四本半にはたれがした
ゆふべわかれてかゑして見たがこよひあわねば気がすまぬ
めもとはなもとこの子の顔を見れば見るほどおもひだす「(三

ウ)

三十九 東都一流与志好野ふし

東都一流与志好野ぶし

龜村卯一「(表紙)

(空白)「(見返し)

いつかふたりがめうとにならばてなべさげてもうれしかる
るくにおかほもしらないわたしおつなごゑんてぬしのそば
はだかであらすはもとよりしようちみんなおまへをかわいさに
にくいしうちも人めのせきにそれをいふのはぬしのやぼ「(一オ)
ほんにおまへはやきもちぶかひおほへもないこといゝならべ
へんなうはさをきくたびごとにおもひすごしてぬしのこと
とうざかるのはすへさく花よしんぼしやんせちつとのうち
ちはががふじてせなかとせなかあけのからすがなかなをり「(一
ウ)

りんきせまいとたしなみながらなぜかこゝろがやすまらぬ
ぬしのごゑんとまただまされててゝはみんなにわらはれる
るすをめぐけてそとくるまぶをしのぶこゝろのうれしがを
をもへおもはれかうなるからはぎりもせけんもまゝのかわ「(二
オ)

わたしやこれほどおもふてゐるにこふもじやけんになるものか
かみやほとけにねがへがとゞきけふのごげんのうれしさよ
よいにしのばせようノのことであふてかへしてほつとした
たとへのゝすへ山おくまでも手をとりはして女夫づれ「(二ウ)
れへのやぼめをだましてかへしおまへにそひねはつみなうそ
そうたゆめみてついおこされてあとがみたさにはらがたつ
つきにむらくもはなにはかせよぬしにあふよのあけのかね
ねてはかんがへおきてはふさぎあはねきやおもひがますわいな
「(三オ)

ないてわかれてついそれなりにひとりねる夜のあだまくら
らくなせかひにくがいなつとめしばしわすりうとやけでのむ

むねにしあんはさだめてあれどぐちがかうじてものおも
うはきなおまへについほれこんでわたしやあわびのかたおも
(三ウ)

京とめでたくいもせのまなびかわらしやんすなかわるまい」(六
ウ)

四十 都々一

都々一 二編

馬喰町三丁目

吉田屋小吉板」(一オ)

ゐかにわたしがつとめのみてもこふもうたがふものかいの
のやまこへてもおまへとふたりそふとおもふているもの
おもひつめたるふたりのなかはわすれまへぞやすへながく
くるかノとまつみのつらさあへばまじめではづかしや」(四オ)
やがてふうふとおもふてゐれどむねのけむりがあさまやま
まゝにならぬがうきよといへどあまりしんきとちやはんざけ
けさもゆふべもおまへのうはさあんじすごしてものおもふ
ふかくなるほどおもひがますよはやくゆきたやぬしのと」(四
ウ)

れれの野暮めがまたしげノにうるさいことだよどうしやう
ぞ
そ ふたゆめ見てつひおこされてあとをみたさにはらがたつ
(一ウ)

こいしノとおもふていたがゆめじやないかへぬしのこえ
えんのつなやかやたよりがありてぬしのところへふみしたて
ていしゆきどりのぬしより外にうわきどころかなんのまあ
あいのおさへのむさけよりもふたり手ぎけのおもしろさ」(五
オ)

ららくなせかいにくがいのつとめしばしわすりよとさけをのむ
む むねにしあんはさだめてあれどぐちがこうじてものおも
う うはきなおまへにしみノほれて」(二ウ) わたしやあはび
のかたおも

さいたさくからもみだれりやちるよしんぼしやんせやちらぬさき
きがねつくしてしんきのくろうおつるなみだのそばにつゆ
ゆふべあふたにまたかほみたしふみにおもひをふうじこめ
めがをしのんでうきなをたてゝまよふふたりがこいのやみ」(五
ウ)

あゝかにつとめのわたしぢやとてもこうもうたがふものかいの
の やまこへてもおまへとふたりくらそと思ふてゐるもの
(三オ)

みへもかざりもなくほれぬいてぬしのことばをまちくらし
しのびあふよはみじかふてならぬにくやよあけのかねのこゑ
ゑきもないことさきぐりをしてぬしをあんじてものおもひ
ひとめしのぶははじめのうちよいまじや人めも世のぎりも」(六
オ)

お おもひつめたがふたりのいんぐわまゝにならねばつれてゆく
く くるかノとまつ身のつらさあへばわかれのまたつらや」(三
ウ)

もとはたがひのこゝろやすだてよすねづとこちらをむかしやんせ
せかれなぶられわしやつとめのみこよいもひとりでなきあかす
すいたおまへと江戸おぶざかでせたいもちたいきのふ京

や やがてふうふといふてはいれどむねのけふりがあさまやま
ま まゝにならぬがうき世といへどあまりしんきとちやわんざけ」
(四オ)

け けさもけさとおまへのうはさあんじすごしてもものおもふ
ふ ぶかくなるほどおもひがますよはやくゆきたやぬしのと」

ふ ぶかくなるほどおもひがますよはやくゆきたやぬしのと」

すいたおまへと江戸おぶざかでせたいもちたいきのふ京

すいたおまへと江戸おぶざかでせたいもちたいきのふ京

すいたおまへと江戸おぶざかでせたいもちたいきのふ京

すいたおまへと江戸おぶざかでせたいもちたいきのふ京

